

# 京鹿子

昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可  
平成十九年七月一日発行  
通巻九九五号（毎月一回一日発行）



7月号

薬の日  
丸山佳子

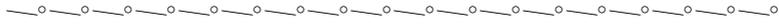
剃りたての首に御陵の木の芽風

歯応えのメニューや峠の大桜

残り鴨と塩のきいたるお握りを

わけもない小銭で重し木の芽坂





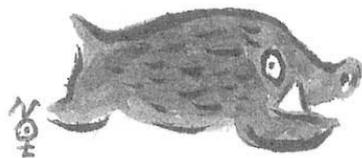
一礼し花粉マスクの女子警官  
山彦さん海彦君も卒業式  
やさしさに慣れてならぬ薬の日  
一笑に付してはをれぬまだ花粉  
佐保姫からピンク封筒に十七枚  
某日のことを寸記し髪洗ふ



豊田都峰

清響集 その七十五

山芽吹く音いくたびか隠れ棲む  
一陣のさくららふぶきに攫はれり  
チューリップあますことなし日の乾杯  
川風の一品として冷奴  
春昼の起承転結雲のこと  
宮址や青葉は影を重ね合ふ



木洩れ日の綾涼風を生む宮址  
街路樹のかげしろがねに薄暑なる  
自画像のひげのうすさにある薄暑  
つばめ反るみなみの雲をひからせて  
薫風は大弧となりてびわ湖越ゆ  
薪能闇のおくからシテの笛  
小面の泣くや爆じける薪能  
検非違使はひらく祭の一行を

---

# 足摺土佐行

豊  
田  
都  
峰

足摺への思い

前師の最後の吟旅は しまなみ海道であった

まだ渡橋はすべての島をつないではいなかったが

思えばその南に四国があった

私が企画した最初の吟旅は讃岐であった

先師が最初の吟旅として渡られたからである

讃岐の南にしまなみ海道があり

その南の先に 足摺岬があった

千号記念年の吟旅としての指向点でもあった

灯台をまづ記き据ゑし春の海図  
麦秋野南へかくる雲にのらむ  
幟立つ海に育ちし風の中  
山若葉溪青葉越え南行す  
山青葉海へなだるる外はなし  
もくもくと同行埼の遍路寺へ  
幾山河後ろに南風の碕灯台へ  
大南風一身に受く碕灯台  
祖の青田登りのぼりて守るたつき  
青葉季の南海道の風となる  
広角な浜広角な南風の沖  
龍馬像同心円の海南風

## 秀華採集

野遊びのうしろを媪の糸車

井上 菜摘子

野遊びに親子の姿でも描き、その「うしろ」、空間的なものでも、時間的なものでもよい、そこに媪が回す「糸車」の日々があった。この組合せに、詩が作り出す生活の匂いを感じたらよいのではないか、そしてひとつのメルヘンを。

雪折れの餌の中に武田菱

木山 杏理

のどけしや影ごと坐る木のベンチ

岡本 一路

前句は、盛衰を象徴的に捉えている。後句の、「影ごと坐る」の把握がたいへんよい。

鈴鹿 仁

足摺岬・桂浜吟旅

卯波寄す灯台守の土佐がらす  
名も知らぬ鳥きて土佐は麥の秋  
海指せばかつを曇りと言ふ彼方  
かつを漁をとこ港を膨らます  
土佐つ子の唄ふ「ヨサコイ」大夕焼  
鯨釣る譚は前世さつき波  
龍馬の目国を想ひて灼くる浜

近 詠

宇都宮滴水

足摺岬

黒潮や沖の白帆が夏を呼ぶ  
夕焼て舌の先から潮に濡る  
青岬なにを合図に潮満たす  
夏つばめ切り岸の浪仇とせし  
さくら貝探す乙女のうしろ影  
龍馬像潮灼け雲を身に近く  
のり搔女けふの終りのうしろ影

神麓集



やきものや土と炎で春夕焼  
陶芸の清水卯一や風光る  
宋代の釉技を基に春茜  
釉薬の色まつたりと花みづき  
仁清の色絵藤花文茶壺

林 日圓

山梯子  
丸山冬鳳  
枝打つて去年の杉山新鮮よ  
綱梯子杉抱きしめて枝を打つ  
枝を打つ上段綱太山梯子  
枝打つて杉空仰ぎもどる  
山梯子杉に預けて明日も杣

春雷の過ぎしと思ふ暁の夢  
虫出しの雷がたしかに暁の夢  
納棺やシルクハットに菊真白  
シルクハット抱く遺骸に菊埋む  
あるなしの風にも聴く花の散る

北村 香朗

青田風  
竹貫 示 虹  
青田風一本の道通りけり  
炎天の死者へみんなが目をつむる  
蝉鳴いて十二神將みな怒る  
修羅かくす甚兵衛の紐締め直し  
月下美人雄薬わあわあとりかこむ

おのみち 和田 照海  
花山へ直登といふ鎖かな  
島の上に島を重ねて花の山  
水道の十字航路や風光る  
絵のまちの渡しの笛や蠅生る  
放浪の末の六畳春障子

まぼろの天 伊藤 希眸  
梅林に配線まぼろの天がある  
草萌ゆる配所の跡に瓶ころげ  
野仏へ子の心配の落椿  
配送車万朶の花の中駆ける  
箸配るこれも一役花見酒

神麓集



化粧して化けてゐるなり万愚節  
引つかけられ可笑の四月馬鹿  
大朝寝夢にジヤンダル抜けられず  
整然と回る発電用電車  
雪柳奔放に伸び白い乱

丹生をだまき

朝堂院の棟上ぐ迄の北風強し  
佐保懸て花の瀬となる寺域経て  
渦潮の漏斗すぼみに涛を巻き  
選挙期の平城原野に声透る  
通院の往還花の佐保路とし

奥村 鷹尾

蝶の昼

藤岡 紫水

いさぎよく呆けて風の葱坊主  
もて余す白い時間や蝶の昼  
へるへると雲泳がせて蝌蚪の陣  
夜ざくらの枝垂れを支ふ水あかり  
屈託のなき風うけて木瓜は朱に

永き日や千手菩薩の手の無聊  
焼き上がる榮螺のこぼす嘆きかな  
花は葉に人の世にある表裏  
石となる貝や蛙の目借時  
桜葉降るや夫婦に腐れ縁

川崎光一郎

松田 都青

角 直指

紅涙も中の涎も花吹雪  
やんはりとしつぺ返しの花曇  
陽炎ひて老老介護の果知らず  
古稀と言ふ若き頃あり花遍路  
人に臍牛に尾があり風光る

紹運にはじまる禅寺梅白し  
宰府より来し飛梅に結ふみくじ  
禅苑の浄寂光に梅二月  
梅白くして追腹と言ふ美学  
樹齡三百一枝乱れず臥龍梅



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

落し蓋とれば菜の花畑かな

春一番夕刊の記事差し替へる

野遊びのうしろを媪の糸車

巾着を逆さに振れば春出水

はるかなる音又へ応ふさくらちの芽

青歯朶の雨滴滴と山に待す

立葵記憶のどこかすれてゐる

雪折れの裾の中に武田菱

言霊を吐きつくしたる蛇の衣

桐の花信ずる明日の絆かな

亀岡 井上菜摘子

東京 木山 杏理

京都 岡本 一路

のどけしや影ごと坐る木のベンチ  
札入れにカード氾濫四月馬鹿

春場所や金の卵に鬩なくて

さより舟東京湾に雨走る

草萌えて万葉匂ふ山の辺道

あちこちに花咲き一人言増えて

首長く帰り待つ子も進学す

入学児姿あれこれメールより

春風や不安を笑ひにチャイニーズ

スイートピー中国夫妻はペダルこぐ

ツーン 伊吹 之博